

苦水の ほとりで



「もうだめだ。置いていくしかない。」

「しかし隊長、そんなことをしたら・・・」

「わかっている。だが、他に何ができるというのだ？」

何か名案でもあるのか？」

「・・・」

隊長にとっても、それは辛い決断でした。葉の生い茂った木陰の水辺に、仲間の一人を担架ごと置き去りにしなければならなかったのです。スペイン人の一団が南アメリカのジャングルを旅している時の出来事でした。

1640年頃のことでしたから、今のような装備も医薬品も連絡手段もありません。そんな中で、一人がマラリアにかかってしまったのです。症状は日に日に重くなり、すっかり弱ってしまったその人は、もう一歩も歩けなくなりました。仲間が機転を利かせて、枝で即席の担架を作り、彼を運ぼうとしたものの、熱帯ジャングルの中、やがて担架を運ぶ者たちにも限界が来たのです。

この病人の状況は絶望的でした。友人たちは食べ物を幾らか残していきましたが、食欲はありません。「水！水が欲しい！」それだけしか考えられませんでした。苦痛を覚えるほどの喉の渇きに、男は倒れこむように水辺にかがみこみました。

ところが、思わず飲んだ水を吐き出してしまいました。その水はものすごく苦くて、飲めるようなものではありませんでした。しかし、選択の余地はありません。喉の焼けるような渇きに、再び少しその水をすするのでした。体の消耗は激しく、彼はとにかく何度も何度も、苦さをぐっと我慢して水を飲みました。すると、おかしなことが起こり始めたのです。その水を飲む内に、少しずつ熱が引いていくようで、痛みも軽くなっていったのです。そして、ついには弱った身体に力が甦ってきました。苦い味の水によって、彼の身体は癒されたのでした。

実は、彼が置き去りにされた所にあった木は、キナの木だったので。それで、近辺の水には、キナの葉や皮

などが落ちて「キニーネ」が分解されていたのです。「キニーネ」とは、アカネ科の樹木「キナ」から得られる成分で、マラリアの特効薬として使われていたものです。南米の原住民は古くから、アンデスの高地に生えるこのキナの樹皮を薬用に使っていたようですが、西洋文明でこれが知られるようになったのは、ずっと後のことでした。

このようにして、マラリアで死ぬ寸前だった人が、自然の恵みによって完全に回復し、その上、このような事がきっかけとなって、結局はマラリアの治療薬が発見されたのです。その発見を通して、いったいどれほどの数え切れない命が救われるようになったことでしょうか。

これが、暗く辛い試練を通過しなくてはならない時に私たちに起こることです。その経験は、本人のみならず、後に続く多くの人たちに祝福をもたらし得るのです。しかし、実に多くの場合、私たちは自分の苦境や運命を呪い、怒りや苦い思いを抱いてしまいます。もしかしたら、実はその苦境こそ、神が私たちの人生や心をいやすために使われているものかもしれないのですが・・・。

あなたは、皆に置き去りにされてしまったように感じていますか？ 痛みと苦しみで、もうどうにもならないと感じていますか？ 自分に残されたのは苦い水ばかりだと？ そんな時にこそ、神の恵みと知恵を信じて下さい。そうすれば間もなく、その「薬の苦味」が「いやし」のために必要なものであったことを発見するでしょう。

困難を経ずして、発見はない

痛みを味わわずして、進歩はない

苦難のほら穴でこそ「ダイヤモンド」が見つかる